



Title	日本学学生企画セミナー：「戦後日本と韓国における労働の記憶、闘争の記録」報告
Author(s)	徐, 潤雅
Citation	日本学報. 2015, 34, p. 221-228
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51377
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本学学生 企画セミナー 「戦後日本と韓国における 労働の記憶、闘争の記録」 報告

徐 潤 雅



2015年1月21日、私たちは学生企画として、上映&トーク「戦後日本と韓国における労働の記憶、闘争の記録」を豊中キャンパス・待兼山会館で開催した。企画者は金ジュナ（代表）、徐潤雅（副代表）、中村友樹、洪ジョンウンである。

当日は、『海を越えた初恋—1989、スミダの記憶』と『ノガダ（土方）』の二本のドキュメンタリー映画を上映し、その後、韓国からお招きした制作者の朴貞淑氏パク・ジョンスクと金美禮氏キム・ミレによるトークとディスカッションを行ない、5時間にも及ぶ会を終了した。以下、企画のきっかけ、趣旨、当日のトークの内容を簡単に紹介し、報告に替えたい。

（1）企画のきっかけと上映作品について

2014年5月、金ジュナ氏が朴貞淑監督の『海を越えた初恋—1989、スミダの記憶』を見たいが、どのようにしたら見ることができるのか分からないと、筆者に相談してきた。日韓を中心とした東アジアの女性労働者の移動に関して研究している金ジュナ氏にとって、『初恋』は重要な参考資料になるという。

一方、筆者は2011年10月¹⁾に朴貞淑監督と金美禮監督に一度お会いしたことがあり、両監督の活動やお話、人柄から大変、力づけられた経験をした。金ジュナ氏の提案を聞いて

たとき、再び両監督に会いたい思いから意欲が湧いた。このように個人的なきっかけで始まった本企画だが、ほかの参会者にとっても意味のある時間になるだろうと、そのとき直感的に思った。日本学の学生企画として海外からお二人ものゲストをお招きすることはなかったもので、最初は上映会のみを開こうと考えたが、秋に金監督とお目にかかったとき、監督は学生企画の趣旨と事情を察知され、少ない予算にも関わらず、朴監督とともに来阪すると約束してくださった。企画した私たちは、独立映画をつくる両監督を支援するどころか、むしろお二人に救われながら本企画の実行に向ったのである。

学生企画の実行委員たちは、韓国と日本における労働運動について理解を深め、さらにその連動的な動きについても知るために、事前勉強会を開催した。勉強会では、1970年代を中心としたアジアの工業化、韓国の労働運動の歴史、釜ヶ崎の日雇労働者について論文を読み、発表を行った。

以下、企画意図と二編のドキュメンタリーを選んだ理由を簡単に説明したい。

* * *

アジア・太平洋戦争後の戦後日本の経済成長、韓国の民主化という政治経済的転換は、日韓の民衆の生活圏にどのような影響を与え、人びとはそれにどのように向き合ってきたのだろうか。

本企画で選んだ二編のドキュメンタリー映画は、朴貞淑監督の『海を越えた初恋—1989、スミダの記憶』（2010年、83分、以下『初恋』）と金美禮監督の『ノガダ（土方）』（2005年、89分）である。

二編の映画はともに日本と韓国、アジアに至る空間軸を交差させており、労働者の生存と闘い、国境を超えた連帯の可能性を見せる。そして労働者へ送る敬意が伝わると同時に、労働者に対する社会システムの不条理が露わとなる。

朴貞淑監督の『初恋』は、1989年から1990年にかけて東京と韓国・馬山^{マサン}で行われた「スミダ闘争」に関わった人々をインタビューと現在と当時の映像で構成された作品である。1989年10月、韓国の馬山自由貿易地域の韓国スミダ電機の労働者たち全員は、突然、ファックス一枚で解雇を通知された。工場を中国に移すため、韓国工場の閉鎖を決めたのである。そこで、「社長に向かって[怒りの気持ちを]言ってやりたい」と、解雇された450名の工場仲間を代表して日本に渡ってきた20代の女性労働者4人は闘いを始める。ハンストも含む彼女たちの闘争は、日本の仲間を支えられながら238日間続き、1990年6月社長の謝罪と組合員全員に一人あたり賃金15ヶ月分を勝ち取り終結した。映画は日本と韓国の闘争参加者の語りと記録映像を通して闘争の記憶を蘇らせる。そして闘争の経験が、20年が経つ現在も彼らの中で生きていることを確認させる。

一方、金美禮監督の『ノガダ』は、日雇い労働をしている監督自身の父親の人生から出発している。監督は父に対して敬意を感じるが、社会は父のような肉体労働者を見下し、生存そのものを不安にさせる。父の人生に纏い付く労働搾取的システムを、植民地時代に遡り、歴史的な文脈から問題視する。さらに労働者の生存問題は日本と韓国、中国、中東へと広がり、見る人を闘争の場面に立ち会わせるのである。

『初恋』と『ノガダ』は、それぞれジェンダー化された労働を扱っている。『初恋』には男兄弟や家族のため、犠牲を強いられた韓国女性の経験が語られる。彼女たちは中学校を卒業したら当たり前のように工場に入り、家族に仕送りをしなければならなかった。自分の夢や才能に気づく暇もなく工場で散々働かされた彼女たちだが、皆とても生き生きとしており、問題があっても避けずに堂々と突破する。その彼女たちに筆者は「生きる力」を見せられた気がした。一方『ノガダ』に見られる男性労働者たちからは「孤独」という言葉を想起する。男性労働者は家族への責任を背負うが、家族や人間関係に甘えられずお酒に慰めを求める。このような孤独な男性の姿は肉体労働者に限らないだろう。

本企画はこの二編を一緒に並べてみることで、女の労働、男の労働のどちらかに限定するのではなく、互いの労働と闘争を一緒に考えたいという意図を込めていた。ジェンダー化された労働や社会的役割によって犠牲にされ、疎外されることには、女も男も問わないのではないかと筆者は考えたが、一方、一言で言えない難しさをも感じている。映画を見た諸参加者方はどのように考えたのだろうか。

（2）ラウンドテーブルでの質疑応答

当日は、第一部・第二部の二部構成で行った。

第一部：開会挨拶、監督紹介、二本の映画上映（司会＝徐潤雅）

第二部：両監督を迎え、質疑応答（司会＝金ジュナ、通訳＝洪ジョンウン、中村友樹＝会場運営）

（当日進行には、黛友明、北原ゼミ参加者らが協力）

以下では上映会後に行った監督たちへの一問一答を簡単に記す。朴貞淑監督に対して、企画チームから二つの質問を行った。

Q1. 上映作の『初恋』や前作の『椿の娘さん(동백 아가씨)』の場合、日本との関わりがあるものだった。韓国の女性労働者を描いたデビュー作から、日本との関わりを持つ人々の人生を追いかける作品へ視野が広がったきっかけ、そういう映画を作り始めたきっかけは？

朴 A1. 『椿の娘さん』を撮ったのは、偶然だった。旅行で訪れた小鹿島（ソロクト）で偶然ハンセン病患者隔離施設の歴史を知った。当時30代前半の私は、小鹿島の歴史をそれまで知らなかったことにショックを受け、反省をした。小鹿島のテーマはその後もずっと心に残り、結局映画制作をすることになったが、日本と裁判が起きていることは知らなかった。映画撮影の終盤になったころ、東京で裁判があり、主人公のお婆さんがその裁判に関わっていることを知った。結果的に東京の裁判がエピソードのように映画に入るようになった。

『初恋』の場合も、私は最初意図していたわけではないが、韓国の女性労働者が日本で闘争する中で自然に日本の方々と一緒に闘った出来事だった。どちらも偶然の出会いだった。

Q2. 『海を越えた初恋』は1989年のスミダ闘争を再現するより、今の時代にその闘争を記憶する日韓の人々の視線に注目する点が印象深い。監督にとって、スミダ闘争を記憶している日本の人々に出会ったことの意味は。

朴 A2. この映画は「スミダ闘争」を知らせるために作ったというより、人々の物語として作った。「スミダ闘争はその人々にとって何だったか」という質問が私の中にあった。彼女たちの闘争は、とても意味のあるものだったにもかかわらず、20年経った今の韓国の社会では忘れられている。それで私は彼女の話聞いて、記憶したいと思った。

闘争に参加した日本の方々は当時を回想される際に、いつも目を輝かせていた。私は彼らが今も韓国語を習ったり、韓国の民衆歌謡を歌ったりされているのを見て、今韓国に住んでいるスミダの女性たちに、今もそうやって眼を輝かせる日本の方々ともう一度出会わせたかった。スミダ闘争は参加者にとって、人生で最善を尽くした経験として覚えられる。今も誰もが現実を生きる上で大変さを持っている。そのような今の人々が、この映画を通じて、問題を避けずに打つかる勇気を感じてくだされば、という願いもある。

次に金美禮監督に二つの質問をした。

Q1. 『ノガダ』では父親が主要人物として登場されていることがすごく印象深かったです。特に、映画の後半部で父親の写真が一枚ずつ流れるシーンがあり、それを見ながら、韓国社会の産業化と政府側の労働政策に沿って生きてきた一人の歴史がよく伝わってきた。父親を映画のなかで描いていく作業で、特に記憶に残るエピソードは。

金 A1. 父を思うといつも胸が痛い。父は2008年になくなった。映画『外泊』の制作の最

中だったときだ。父の人生を振り返ってみると、少し感傷的な気持ちになり、「前世に何があって、現世でこんなに惨めに、搾取され続けながら奴隷のように働いたのか」という思いがある。私がカメラを持って父に初めて向ったとき、父は「何でこんなにみすぼらしい姿を撮るの？」といった。私は父にこういった。「だから撮るの。誰もお父さんのことを撮ってくれないから、私が撮るの」。私にとって父は世の中で一番善良な人だったのだ。

『ノガダ』が釜山映画祭で上映され、自分の姿が大きなスクリーンに映ったとき、父はとてうれしがっていた。それを見て私は、父を撮ったことは、私が今までやったことの中で一番良かったことの一つだと思った。

Q2. 映画の後半では韓国の賃金未払いに対する抗議場面があり、そこに中国からの朝鮮族の方々が出ており、闘争現場で中国語の歌が歌われる場面では、軽いショックを受けた。いままで気付くことがなかった韓国労働の現場を見たような気がしたからである。これは、「労働搾取の連鎖」を見せるシーンでもあると思った。韓国が日本帝国から搾取されていたにもかかわらず、また自分より弱い人々を搾取してしまうこと。監督はその「搾取の連鎖」について、映画制作の初期段階から意識されていたか。

金 A2. 「労働搾取の連鎖」について意識したというよりは、資本はいつも労働を強く統制しながら、資本同士で「連帯」をし、国境を越えて自分らの利益を求めていることを意識していた。資本は、帝国主義の戦争で植民地の労働者を搾取し、いまでは自由化・グローバル化といった名の下で経済的に弱い国々の労働者たちを搾取している。

日本と韓国の建設現場を見ていると、実際韓・日・中の労働者たちが生存のため、命がけで国境を越えている。彼らはまた、生存のため互いに競争しなければならないのである。なので、一国の問題というよりは、アジアや世界における資本と労働の流れの問題、構造の問題として認識している。

最後に両監督へ、質問をした。

Q3. 現在韓国では非正規雇用の問題や就職難の問題、雇用、労働の様々な問題があるが、そういった問題を解決するためにどうすればいいか、両監督のお考えをお聞きしたい。

朴 A3. とて難しい質問だ。現在韓国社会はとても大変で、非正規職が80%以上だという。多くの人が1年ごとに契約を更新したり、アルバイトで繋いだりしている状況で、仕事をすればするほど消耗する労働になっていることが一番の問題だと思う。一言で言うと、

労働に対する意欲がないということである。

解決として、やはり正規職を増やさなければならないと考える。非正規職であっても賃金が真っ当に保証され、福祉制度からも非正規職が保護される環境を作らなければならない。

金 Q3. ご存知だと思うが、韓国社会の両極化が深刻だ。資本は既に莫大な力を持ってこの社会を統制している。反面、労働はとても小さく分散されて力を集めることが大変難しい。韓国でそれでもエネルギーがあるといわれる労働運動も今ではほとんど無力化されている。いま私は何ができるかを考えながら『ノガダ2』に当たる作品を準備している。

ラウンドテーブルでの一問一答は以上である。質疑応答では以下のような内容が出された。

『ノガダ』

- ・主人公のお父さんがサウジアラビアにいたことについて話を聞きたい。
- ・韓国で新自由主義化が進んでいるようだが、新自由主義化の前と後でどのように韓国の労働環境が変わったか？
- ・高齢化問題が気になった。日本の釜ヶ崎では年齢制限などがあり、問題点を含んではいないものの、高齢者特別就労事業があるようだが、韓国ではどのような事業や制度があるのか？

『初恋』

- ・東南アジアに移っていった日本の企業が、その地でどのようなことをしたか、その地での労働者がどのような労働をさせられていたかを追求しようと思いましたか？
- ・韓国スミダ労組と日本の労組との結びつきはどのようにしてできたのか知りたい。大きな団体ではないと思えるが。
- ・監督は若い世代をどう見ているか？

他にも、これらの映画をみた参加者の中には、ご自身の経験を想起した方も少なくなかった。参加者から寄せられた感想には、両監督、登場人物との出会いや繋がり、映画と重なり合う経験が綴られていた。その記憶は個人的で具体的なものだが、それこそ人の中に生きている「歴史」や「運動」であることがひしひしと伝わった。

朴監督のお話からは偶然の出会いから知ったことを流してしまわずに追究する姿勢を学んだ。金監督のお話からは、身近な人の労働経験から大きなアジアの歴史や社会構造の問題へ広げる構想力が感じられた。両監督に共通しているのは、概念的な歴史や運動より、その中を生き抜いてきた人々にフォーカスを当てる姿勢である。

最後に、本企画がきっかけとなって、参加した方々に新たな出会いと繋がりが生み出されることを期待する。私たちが大学で学んでいる歴史や運動そのものも、このような出会いや繋がりの延長線にあるのではないかと考えながら。

*謝辞

まず、本企画に応じてくださった金美禮監督と朴貞淑監督に感謝いたします。本企画は日本学研究室の学生企画ですが、企画から実行までの全過程において、多くの方にお世話になりました。日本学研究室の先生方々、及び、事務職員の皆さまにもお礼を申し上げます。



朴貞淑（パク・ジョンスク）監督
1994年に労働者ニュース制作団で活動を始める。現在「ドキュメンタリー希望」で労働、女性労働、女性をテーマにドキュメンタリーを制作。代表作に『塩—鉄道女性労働者の物語』（2003）、『椿の娘さん（동백아가씨）』（2006）など。ソウル国際女性映画祭（2004）などで受賞。上映作の『海を越えた初恋—1989、スミダの記憶』（2010）が釜山国際映画祭やソウル独立映画祭で招聘上映。



金美禮（キム・ミレ）監督
2000年に大工の父の一日を記録した15分のドキュメンタリーでドキュメンタリー制作を始める。その後、労働や生存を考えさせる作品を多く制作。代表作に『労働者ではない』（2003）『外泊』（2009）『生きる』（2013）など。上映作の『ノガダ』（2005）は独立映画賞（2005）、人権映画賞（2006）を受賞。

日本学学生
企画セミナー 「戦後日本と韓国における労働の記憶、闘争の記録」報告（徐潤雅）

注

- 1) 「コンフリクトの人文科学」セミナー 第77回「社会運動とドキュメンタリー」映画『外泊』
上映+討議（グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」）。2011
年10月16日、大阪大学豊中キャンパスにて開催。

（そ ゆな 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）